

## 2025\_0331「昭和のみどりの窓口（写真）」日々の理科 3889号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

この写真は理科とはほとんど関係ないのですが、あまりにも懐かしいので載せてみました。昭和の「みどりの窓口」です。古めかしい機械や道具が並んでいます。右奥の大きなコンピュータのような卓は「マルス」といって、長距離乗車券や特急券、指定席券、寝台券などを発行する機器です。

昭和の時代は、全国の駅のみどりの窓口や旅行センター、交通公社の窓口などで見られました。本のページのようにめくれる操作盤に、出札の係の人が素早く駅名を選んでピンを打ち込んでいく仕組みです。人気のある寝台特急の切符など、発売から数分で売り切れてしまうので、操作する人の腕（素早さ）も重要でした。予約がとれると操作盤の左上の緑ランプが光り「やった！」となります。とれないと赤ランプで「あ〜あ」となります。気の利いた係の人だと、すぐに似た条件の列車を探してくれることもありました。青森行の超人気の寝台特急「ゆうづる号」の寝台券なんかとれると、客の方が「あ、あ、ありがとうございます！」なんて、逆にお礼を言ったものです。

その左奥は、乗車券や急行券の格納キャビネットで、主な行先の「常備券」が入っていました。日付は手前にある台形の機器「ダッチング・マシーン」で刻印されました。実は「デイティング・マシーン（日付刻印器）」が正しい名称なのですが、なぜか誤った呼称が定着しています。私が小学生の時に通学で毎日利用していた京王線の小駅には、切符の自動販売機がなかったので、すべての切符が駅員さんによる「手売り」でした。その時に、一瞬で切符に日付が入るこの機器が不思議で仕方なく、駅員さんに仕組みを見せてもらったことがあります。私は「ガッチャン」と呼んでいました。今、実物を一台所有しています。

今は「みどりの窓口」そのものが大幅に削減され、鉄道の切符は券売機かインターネットで買う時代になりました。こういう実に人間味のある窓口がすっかり姿を消してしまったのは、何となく残念なことです。

(2025年3月下旬/さいたま市・鉄道博物館)

